

高齢者の室内転倒事故

宇敷 辰男

昨年九月の敬老の日に一人暮らしの母を囲んで、妹夫婦も集まり食事をしていたら、九十八歳の母が軽い脳梗塞を発症した。最初に母の言動の異変に気付いたのは妻だった。救急車で脳神経外科に運ばれ点滴治療を受け梗塞の広がりは止まった。リハビリ措置を受け認知症も問題ない評価で二週間程で退院の許可が出て、医療ソーシャルワーカーと相談しリハビリ病院への転院を検討した。

しかし母は一人で歩けるようになったので、入院前の生活が出来ると言い張り退院した。ところが自宅に戻ったその日の夕方、段差で「転倒」。打撲で右足腰を痛め、結局リハビリ病院に入院した。

段差のある部屋で一人暮らしは難しく、妻とケアマネにも協力してもらい、見守り介護や生活支援のある介護施設を探した。

リハビリで少しずつ杖を使って歩けるようになり、一ヶ月余りで退院し十一月半ばにサービスポイント付き高齢者向け住宅に入居した。母の友達や甥っ子夫妻も訪ねてくれて、新しい住まいに少しずつ慣れてきた。妹夫婦や孫ひ孫と一緒に和食レストランへ出掛けられるくらい回復して一安心した。ところが年末、バリアフリーな自室で「転倒」。

休日救急外来を受診したところ、大腿骨を骨折していた。幸い大腿骨の根元ではなく端の骨折だった。入院には到らずサ高住で三食配膳サービスポイントを受けて過ごした。節分を過ぎた頃から大分元気が戻ってきて、シルバーカーを使って一人で食堂へ歩いていけるように回復した。

今年三月、白寿の誕生日が近づいてきて、我が家でお祝いの宴を開くことにした。妻が祝いのデコレーションや献立を考え準備し、私が部屋の掃除を引き受けた。丁寧に掃除機を掛けていたら延長管の突起に、私の靴下が引っ掛かり「転倒」。そこにあった加湿器に胸を打ち付けろっ骨を骨折した。

母のために八年前に取って置いた「高齢者の家庭内事故防止見守りガイド」を見ると「転倒に注意」と書いてあった。その資料が自分に役立つ年代になったことを自覚した。